

私にとって、フォーラムで得た経験と言うのはとてつもなく大きく、そして有益であり、過去19年間の中でも最も印象に残る出来事でした。このフォーラムに参加しようと思ったこと、日本団が協力し合って日本の文化を紹介したこと、韓国や中国の学生と積極的に交流したこと、いずれも過去の自分からは想像できないような積極的なアクションを起こしていたと思います。このような体験を通じる中で得られた自信と言うのは、これからも大切にしていきたいです。

東北アジアが達成していかなければならない課題は沢山ありますが、個人的には、まず自国文化を知ることだと思います。私はフォーラムの間、韓国や中国の学生から日本の歴史について聞かれることが多くありました。国際交流の最低限のベースとして、相手の国について詳しく聞きたい、という要求に答えられる知識を持つことも大切です。自国のことを知らなければ相手の国のことも分からないと思います。われわれ個人に必要なのはつまり、「外を見る」前に、自国という「内を見る」ことなのです。インターナショナル、グローバルイズムという言葉がもてはやされて久しいですが、そうした思考の前提にあるのは、自分たちの国や文化を知ることなのではないでしょうか。

## 中国を訪問して

2010年10月11日～17日

国際 IC 日本協会会長 矢野弘典



10月中旬に中国国際交流協会の招きで、北京、成都、上海を訪問しました。わが国際 IC 日本協会との交流が始まって10年になりますが、各地で暖かい歓迎を受け、親交を深めることができました。メンバーは、高橋衛さん、太田和江さん、弓場睦さん、長野清志さん、それに私と妻景子というチームワークの良い6人です。劉氏のノーベル平和賞受賞、尖閣列島問題、成都での反日デモなど何かと騒然としていましたが、町中を散策しても少しも不愉快な場面には遭遇しませんでした。

心に残ったことについて感想を述べます。一つは、両国は問題山積の折から、あらゆるレベルで親密なコミュニケーションのパイプを必要としています。私たち

は政治でも経済でもない、一般国民の良識や心を代表する NGO として、他にはない重要性があることを肌で感じました。もう一つは、若手要人との会談の中で、孔子の言葉や杜甫などの詩人の名前が自然に出てきたことに、嬉しい驚きを覚えました。一昔前に比べると大きな相違です。洋の東西を問わず古代の哲学者や宗教家の言葉には、世界に共通するコモン・センス(常識)の基礎があります。何かが底流で変わり始めたのでしょうか。三つ目は、今回見学した上海万博、四川省大地震の復旧工事の現場からは、2年前の北京五輪と合わせ、国家の威信をかけた意気込みを感じました。希望に満ちた東京五輪、大阪万博の頃を思い起こしたのは私だけではないことでしょう。来年は中国の皆さんを、日本流の「おもてなしの心」で迎えたいと思います。



▲汶川にて歓迎を受ける スカーフの赤と白はチベット族・チャン族の象徴



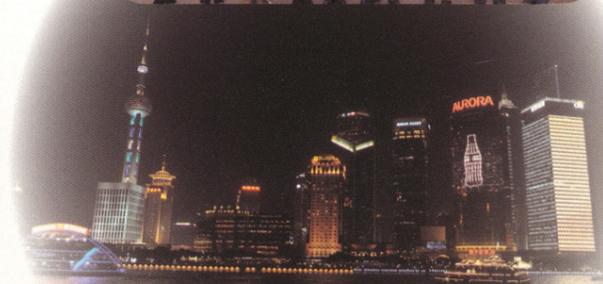
(上) 成都・金沙遺跡では珍しい晴天に恵まれた (右) 上海万博中国館前にて



▲政治協商会議四川省委員会の張 雨東 (Mr.Zhang Yudong) 副主席と



(上) 汶川の被災地の様子と (下) 復興した再開発街にて



## 東北アジア青少年フォーラム レポート

### ” 大学5年目の青少年フォーラム ”

大阪大学外国語学部4年 青木 豊

フォーラム初日、現地参加という状況でとても緊張していましたが、韓国メンバーから私に「文化公演のサムルノリ(韓国の伝統音楽の一種)に出てくれないか」とのお願いがありました。韓国の伝統音楽については、昨年から1年専門的に学習してきましたが、公演で披露したことは未だありませんでした。これに参加することは何か意味のあることになるのかもしれない、そう感じた私は文化公演への参加を決意しました。日本メンバーの文化公演もある中、短い練習期間ではあるが覚えらるる限り覚えるんだと自分に言い聞かせて練習し、本番に臨みました。



公演では、終了と同時に拍手喝采。舞台から降りるとき、私は「留学で、何か形になるものを作りたい」という願望を思い出し、それが今、叶ったのだと感じたのです。この公演に参加できたことは、私がフォーラムに参加することに意味を与えてくれたとともに、私の留学にも大きな意義を与えてくれたのです。この出演は、私が韓国について、特に韓国の伝統音楽について専門である、という自信をもつきっかけを作ってくれ、また他のメンバーとも仲良くなれたと思います。(2009年より1年間釜山の大学に留学)

### ” 国境を超えた友人ができた ”

明治学院大学経済学部2年 鈴木千尋

実際現地に到着すると、最初は緊張の余り自ら他国の人に話し掛ける事ができませんでした。しかし、韓国や中国の学生が積極的に交流を深めようとしてくれ、次第に打ち解けることができました。最後の2日間は、異なる価値観や文化を越えて、朝まで語り合い、国境を超えた友人をつくることができました。

このフォーラムに参加して語学の大切さを痛感し、話したくても話せないというもどかしさを初めて感じました。これまでは、英語や第2外国語を話さなくても、特に問題ないと思っていましたが、このフォーラムに参加し、考えが一転しました。グローバル化が進む現代に語学は他国の人々とコミュニケーションをとるためには必要不可欠であると思います。また、日本の企業が世界から差をつけられないためにも欠かせないものだと感じました。ニュースでよく取り上げられている外国に行きたがらない内向き志向の学生とは、まさに私のことだったのです。



### ” 日中韓の若者だからできること ”

一橋大学社会学部社会学科3年生 須崎奈々

ディスカッションでは、歴史認識についてなど、かなりデリケートな部分へも話が及んだ。日本は他のアジアの国に酷いことをした過去があり、嫌悪感をもたれているのではないかと感じていたが、実際中国、韓国から参加した若者たちの話を聞くと、そうは思っていない、それどころか日本文化、



日本の歌手や芸能人、テレビ番組などは、中国、韓国でも人気だそうだ。こうした点からしても、若者同士の交流は、国家間の友好を図る上で効果があると言える。若者は戦争などの過去の出来事に縛られず、むしろ同時代の文化を共有することで相手国への友好的感情を持つことができるからである。

実際参加して、予想と大きく違ったのは、かなり多くの中国、韓国の方が日本語を話していたということである。予想では、三カ国の共通言語はおそらく英語であり、ほとんど英語を使うものだと思っていたが、行ってみればほとんど日本語で通じた。韓国人同士が韓国語で話していても、日本語または中国語しか分からない人がいれば、その場にいる誰かが日本語や中国語に訳してくれた。参加者たちの中では、日本語、中国語、韓国語の3言語が飛び交うという面白い状況が出来ていた。英語という欧米の言語ではなく、アジアの言語を使っていたという点は、今回のフォーラムの趣旨に合うものだったと思う。しかしこれは中国、韓国からの参加者の多くが2ヶ国語喋ることができる点に依存しているところがある。日本人参加者も中国語、韓国語どちらかの言語が話せればさらにコミュニケーションが円滑になるだろう。

去る9月に開催されたIC交流会に参加したオーストラリアのICメンバーであるトム・ダンカンさんから寄稿頂いた日本での体験をご紹介します。

## 日本の癒しの湯を訪ねて

トム・ダンカン（オーストラリア）



私が日本を訪れたのは、6ヶ月経っても治りの遅いくるぶしの怪我のためでした。良く調べてみると、歴史的にも、天皇家や将軍家も怪我や骨折の治療に利用したという草津温泉が、湯治には一番良いと知りました。ゆっくりと、しかし確実に毎週くるぶしの動きが良くなってきました。「よろよろ歩くような状態から山歩きができるような大きな変化が数週間のうちに起きるなんて、これまでに見たことがない」というのが、私のオーストラリアの理学療法士のコメントでした。

3週間後には東京のICハウスの交流会で、平和な未来について考える多くの話を聞いて、希望を持つ事が出来ました。日本の癒しの湯が非常に効果を上げていたので、更に個人的な癒しの段階にも進むべきだと感じ、日本のICの専従者である長野氏に、以前私が日本や日本人に抱いていた感情について話しました。

祖父が第二次大戦中に日本の捕虜になりビルマ鉄道で働かされたこと、そこでは、日本の兵士の野蛮な行動や冷酷な仕打ちのもと、祖父の多くの友人たちが亡くなったこと。殆どの捕虜が亡くなった死の行進を生き延び、船で日本の釜山に送られる途中、船が撃沈され6人だけが生存したこと。その内の一人が祖父であり、もう一人の生存者と船の木片につかまり、溺死者や火傷を負った人々を襲った鯨に囲まれながらも3日間泳ぎ続けたこと。2人はベトナムの海岸にたどり着き、幸いにベトナムの人の家で重湯を飲みながら3ヶ月で健康を回復させてもらったこと。日本への原爆の投下と共に、戦争が終わったことを祖父は喜びました。それは、戦いや死、そして残虐さの終わりを意味したからです。日本人の苦しみは世界に対する、そして、彼に対する残酷さの罰だと考えたのです。巻き込まれたすべての人々にとっての戦争の残酷さを思うとき、私はやりきれない気持ちになります。祖父は自身の戦争体験を私たちに伝える中で、日本人は地球上で最も残忍な人種だから注意しろ、信用してはいけないと言いました。

私は大学で、心遣いのできる日本の青年たちに会った後、日本人を憎むことはやめよう決心しました。しかし残念なことに、その内の誰一人として日本が戦争で他国へ侵略したことについて理解していませんでした。学校や大学での教科書でさえ、ドイツと手を組んで世界に抗した日本の戦争についての詳細な説明は省いてしまっているように思えました。しかし、学校で戦争の歴史を学ばなかったのは彼らの落ち度ではないと考え、自分の心の傷を忘れ去るよう試みました。

日本滞在中、くるぶしの肉体的な痛みがあった訳ですが、自分に対して人種差別をするような日本人の態度に接すると、心の中により大きな痛みを感じました。大きなスピーカーと日本の国旗をつけた車が発する、「すべての外人は出て行け！」といったスローガンは極めて直截的です。時には怒りの気持ちがこみ上げてきます。祖父の戦争の話を長野さんにした時、彼は、お祖父さんとご家族が苦しめられたことは申し訳ないと言ってくれました。これは有難い言葉でした。何故なら、彼は自分が戦争に関わった訳ではなくても、長年にわたり異なる文化の溝を埋め、和解をもたらすために活動してきたからです。私自身も長い時間を経ても傷ついた記憶がまだ残っていると気付きました。祖母は、祖父がオーストラリアに戻った後、祖父と離婚しました。祖母は戦争が続いた4年間の間、祖父の消息を聞いていなかったため、もうずっと前に亡くなっていると思っていたのです。祖父が戻った時、祖母はまるで影にでもなってしまったかのような祖父の姿や彼の心が負った痛みや傷を直視できず、又、自分自身の心の傷も直視できなかったのです。

私の母は祖父と新しい義母と暮らすことになりましたが、義母は母をひどく嫌い、母が16歳の時に高校を辞めさせ家からも追い出してしまいました。母は心理学者になって、戦争の苦しい体験が心に宿った祖父の苦しみと強い怒りを理解したいと望んでいましたが、高校を終えられず大学には行けませんでした。母と私の間にはしばしば緊張した関係が生じました。それは、母の果たされなかった夢、そして母のやり方とはまったく違う私のものやり方、そして、母が両親から見捨てられたと感じていた事実からです。何故なら母の両親たち自身も破綻をきたしていたのです。傷ついた記憶は世代を超えて受け継がれただけでなく、今も私たちの人生に常に影を落としています。例えば、楽しい時を過ごすべき休暇の際でさえ、憎しみや親に捨てられたという感情等の同じ問題が立ち現れ、涙の結末となってしまうのです。ですから、私は、この祖父母、母、そして私の父と、彼の父親（私にとってのもう一人の祖父）という、それぞれの傷ついた記憶に直面する必要性を感じたのです。

私の父の傷ついた記憶は、日本がオーストラリアへ侵攻し、ダーウィンの町を爆撃し、そして、オーストラリアの北部の島であるパプアニューギニアへ軍隊を送った時、彼の父親が日本人と戦うために家を離れなければいけなかったということから生じています。父は70歳を越えていますが、先のクリスマスの際に、戦争中、父親が恋しかったこと、男の子一人が取り残されるようなことがなければいいのにと願っていたことを、泣きながら話し出したのです。父は文明からはほど遠い田舎の農場に家族から離れ、一人ぼっちで周囲の世界に心を許すこともなく暮らさざるを得なかったのです。学校も快適な場所とはなりえず、16歳で仕事に就いたため大学に行くこともできませんでした。母も父も人生での喪失感を抱えています。双方の父親は共に戦争で家を離れ、帰ってきた後も、苦しみや怒りの感情に溢れ、生活は以前とはまったく違ったものになってしまったのです。このことが私自身の生き方にもどれだけ影響を与えてきたのか、又、解き放とうと試みたにも拘わらず、幾許かの傷をそのまま抱え続けてきたということも分かります。長野さんに自分の家族の話をしたことで、それまで自分でも気付かなかった感情を解き放ち、又、客観的に見る助けになりました。日本の癒しの湯はくるぶしのためだけでなくそれ以上に役立ちました。それは、長野さんの聴く耳であり謝罪でした。それは精神の癒しの湯のようであり、意識して自分の傷ついた記憶を直視し、日本と日本人との関わりの新たな出発となりました。この体験を家族とも共有し、家族が癒される役に立ったらと願っています。

## スイス・コー国際会議(第4・5・6セッション) レポート

スイス・コー国際会議第4セッション(8月4日-10日)「持続可能な世界に向け変革をリードする」と、第5セッション「ICのトレーニング」は同時並行的に開催されました。参加者は世界47カ国から約350人、日本からはファミリーワークショップのトレーナー兼松恵さんとコミュニティグループのファシリテーターとして参加した私の2名でした。このセッションの目玉は、午後に組まれた第4・第5セッションの参加者による独自のワークショップ。第5セッションでは、ワークショップ「ピースサークルを経験する」、「ピースサークルを運営する」、「信頼構築」、「ファミリーワークショップ」、「公職に於ける倫理的リーダーシップの実例研究」、「平和教育の企画・運営」が提供されました。その中でもアメリカのバージニア州の州都リッチモンドで、過去20年間、異なる人種・宗教間の人々の間の信頼構築に取り組んできた、ロブ&スーザン・コックラン夫妻による「信頼構築」のワークショップは、とても充実した実践的な内容でした。ロブ氏が仰っておられた「信頼というものは、社会の重要な資本。壊れやすいので毎日強化しなければならない」という言葉が印象深く残りました。(文 中山啓介)

### コーの素晴らしさに触れて

中日本高速道路(株) 春名 晃宏



初めての訪欧は、同時に初めてICとコーに触れるとても有意義な時間となりました。会社の先輩とともに、コー国際会議第6セッション「Trust and Integrity in the Global Economy (グローバル経済における信頼と誠実さ)」に参加し、その中で当社のCSRに関わる取り組みを紹介する機会も頂きました。コーでは恥ずかしながら年齢34にして初めて「自分のビジネスが世界にどうつながっていくのか(いくべきなのか)」を沈黙することとなりました。それまでの自分を省みれば、「自分にとってのビジネス」の意味は、マズローなどを読み、それなりに考えることもありましたが、「世界にとっての自分のビジネス」の意味となると、意識することがなかったように思います。私たちのビジネスは、世界にどのように作用できるのか。そして、私たちは世界にどのように活かされているのか。広い空間軸をもって常にそういった自問を繰り返すことこそ、個人のみならず企業にも求められているのではないかと感じました。レマン湖を見下ろすロケーション、異なる国や文化を背景にする方々との興味深い刺激に満ちた対話、参加者が醸し出すホスピタリティ溢れる雰囲気、コーの素晴らしさは枚挙に暇がありませんが、今回の経験は、私にとってターニングポイントとなるに違いないと確信しています。



▲食事の様子



▲コミュニティ活動の様子



▲ワークストリームの様子



▲オープニングの様子



▲MDGセッションでNEXCO中日本のCSRの取り組みを発表

## ICセミナー開催される

去る10月23~24日都内のアルカディア市ヶ谷で「企業の社会的責任(CSR)を考える」をテーマに29名の参加者を得たICセミナーが開催された。これまでミニHOHOの名称で16回開催してきた研修プログラムの名称を変更してテーマを絞り、参加し易いように都内の施設で開催されたものである。講師に元富士銀行会長橋本徹、前中日本高速道路会長矢野弘典、横河電機企業倫理・CSR部長佐野廣二の各氏をお招きし、企業の社会的責任について体験を通したお話しを伺った。



橋本氏の深い信仰に基づいた銀行責任者としての体験談、矢野氏の関連会社再建時の社員との心の繋がり、また現職でCSRを担当している佐野氏からは、今まさに展開している会社の本業を通じた社会的責任の具体例をお話し頂いた。その後のパネルディスカッションでは、前記3氏に太田和江リアルイズオウ社長が加わり活発な意見交換が行われ、今後は企業の社会的責任から個人の社会的責任を考えていくべきとの意見が出され多くの方々から賛同を得た。参加者からも「CSRに関する考え方の整理に大変役立った。個人としてのSRに対応してゆきたい。短い時間であったが幅広い立場の参加者と会話でき、大変有意義なセミナーであった」との評価を得た。

[お知らせ] 心を育てるネットワークセミナー(第18回日本ミニHOHO) in 唐津  
日時 2011年3月5日(土) - 6日(日)  
会場 唐津シーサイドホテル 〒847-0017 佐賀県唐津市東唐津4-182  
講演テーマ「自らの人生をふり返って」(予定)

- 1月16日-22日 韓国ICキャンプ(韓国)
- 3月 IC総会及び交流会(世田谷ICハウス)
- 5月~6月 国際ボランティアグループの学校訪問(東京・小田原・福岡ほか)
- 7月2日(土)3日(日) ICフォーラム(国際会議)(東京・東品川)
- 7月16日-24日 アジア太平洋青年会議(APYC)(オーストラリア・フィリッパ島)
- 7月~8月 コー国際会議(スイス・コー)
- 8月 東北アジア青少年フォーラム(韓国)

『2011年の主な予定』

### 生活の中で役立つことば③

“誰が正しいかではなく、何が正しいか”をしっかりと考えなきゃダメですよ。親だって、教師だって、間違うんだから。お偉いさんが言ったから、それが正しいなんて思っちゃダメ。何が正しいか、それを判断するのは自分の良心です。自分の良心の中に、善悪の標準をしっかりと持つことが大切です。(石田尊昭著『平和活動家 相馬雪香さんの50の言葉』110頁より)

## 〈入会のご案内〉

IC(Initiatives of Change...前身はMRA(Moral Re-Armament)。1938年にロンドンで発足して以来、〈対立する相手や国を変えたいと思うなら、まず自分や自国から変わるべきである〉という理念に基づき、あらゆる民族、宗教、文化の根底に流れる共通の倫理観(モラル)を普遍的な〈正直・純潔・無私・愛〉という4つの絶対標準としてまとめ、それをもとに世界各国で紛争等の問題解決に不可欠な相互の信頼関係を醸成する活動を進めてきました。国連の認定を受け

- 正会員(議決権を行使できます)
  - 個人会員 年額 6,000円
  - 法人会員 年額 50,000円
- 賛助会員
  - 個人会員 年額 3,000円以上
  - 法人会員 年額 50,000円(一口)以上



▲ICハウス(東京都世田谷区)

- 会費・寄付金の振込先
  - ゆうちょ銀行 郵便振替口座番号 00180-0-38289 口座名 社団法人国際IC日本協会
  - みずほ銀行渋谷中央支店 普通預金口座番号 162-4945790 口座名 社団法人国際IC日本協会

## @編集後記

今回はアジア・太平洋地域の絆の重要性を改めて確認することとなりました。皆様からのご意見ご要望をお待ちしています。広報委員：海老原真美、岡本さくら、高橋久子、宮本由紀子、長野清志、弓場陸